



北方民族博物館だより

No.86



H22.3 壁掛け「夏のくらしいろいろ」 67×43cm
イヌイト メリー=ケケネック作 カナダ/ジョアヘイブン

防寒着の材料となるダッフル地にフェルトのアップリケや刺繍をほどこして作られています。イヌイトの壁掛け自体の歴史はそれほど古いものではありませんが、その中にはイヌイトの人びとに古くから伝わる縫製の技術や、物事の捉え方などが凝縮されています。写真の資料では、イヌイトの夏の住居や、やすをつかって魚を捕るようすが表されています。

目次 Contents

- 1 表紙 壁掛け「夏のくらしいろいろ」
- 2 第27回特別展「東シベリア・サハ 永久凍土の大地に生きる」
- 3 講習会「東シベリア・サハの楽器・口琴体験」「東シベリア・サハの刺繍」「東シベリア・サハの料理」
- 4 アイヌ文化講習会「アイヌのシカ笛づくり」/講演会「氷と寒さを利用する文化：サハの生活と社会」
- 5 調査報告「能取岬西岸遺跡発掘調査」/北海道博物館紀行「根室市歴史と自然の資料館」
- 6 INFORMATION



第27回特別展

東シベリア・サハ

永久凍土の大地に生きる

2012.7.14-10.14

日本の約8倍の面積を持つロシア連邦内の国・サハ共和国は領域の大部分が永久凍土に覆われ、人が住む土地としては世界でもっとも寒いとされています。しかし、こうした環境でも人びとは独自の民族文化を育んできました。

北方民族博物館は平成17（2005）年にサハ共和国国立ヤクート北方民族歴史・文化博物館と学術交流協定を締結し、以降、サハ共和国の民族資料収集に努めて参りました。本特別展では、サハ（ヤクート）民族を中心に、サハ共和国に暮らす人びとの伝統文化を紹介しました。

永久凍土の大地—東シベリア・サハ共和国

サハ共和国の年間降水量は300mm未満と極めて少ないのですが、地下の永久凍土層が水の浸透を妨げているため、針葉樹林が発達しています。また永久凍土は、マンモスの遺体を冷凍保存していることでも知られています。

特別展の冒頭部分では、永久凍土の分布や役割について解説し、マンモスの実物大模型や臼歯、牙を展示しました。

伝統的な生業

サハの主要な生業は、ウマとウシの牧畜です。ともに移動輸送手段として使役され、その乳や肉は食料、皮は衣類などを作る材料として利用されました。

生業文化のコーナーでは、牧畜に関わる道具類、ウマの飾り布や伝統的な鞍などを展示しました。



サハの鞍とウマの飾り布

白樺製品

サハでは、白樺類の樹皮や木材を材料とした木製品が普及していました。樹皮を切り抜いて縫い合わせたり、白樺

材を削りぬいたりして、多様な木製品が作られました。

白樺製品のコーナーでは、桶やバケツのような容器、皿、スプーンなどを展示しました。

サハの衣文化

寒さの厳しいサハの伝統的な上着は膝丈、あるいは地面に達するほどの丈の長い毛皮製コートです。帽子も毛皮製で、側面が伸びて耳を覆うような形をしています。その他、寒さを防ぐため、毛皮製のマフラーや手袋、ブーツなども利用されてきました。

衣類のコーナーでは、毛皮製の帽子、伝統的な型の上着、毛皮製ブーツなど、男女それぞれの正装を展示しました。

サハの工芸

サハでは、馬の毛や金属を使った工芸品の製作も盛んでした。馬の毛は、白樺樹皮製品などの装飾、投げ縄や漁網、鞍のクッションなどに使われました。金属工芸としては、銀製の装飾品、馬具の飾り金などのほか、サハの国民的楽器である口琴「ホムス」も作られてきました。

工芸のコーナーでは、こうした工芸品のほか、木製品や動物の骨で作った玩具などを展示しました。

馬乳酒祭

サハ共和国では、春から夏にかけて馬乳酒祭が催されてきました。祭の中心は、神々を讃えるために馬乳酒をふりまき、馬乳酒を飲む儀礼です。その後、祭の会場では、饗宴やゲーム、歌やダンス、競馬などが行われました。

馬乳酒祭のコーナーでは、馬乳酒用の杯やひしゃく、そしてお祭りの際に女性が身に着ける伝統的な装飾品などを展示しました。

その他、サハ共和国に暮らすサハ以外の先住民の文化やサハ共和国の現在の様子について紹介するコーナー、サハの伝統的な文化について紹介する映像展示や関連図書のコーナーなどを設けました。また、それぞれのコーナーには、現地で撮影された写真を展示しました。

謝辞

本特別展の開催にあたり、次の機関・組織、個人の方々に資料や情報の提供などを通じてご協力いただきました。

記して感謝いたします。

国立ヤクート北方民族歴史・文化博物館、総合地球環境学研究所シベリアプロジェクト、日本口琴協会、直川礼緒氏、高倉浩樹氏、堀咲子氏、江畑冬生氏、檜山哲哉氏、針生幸子氏、池田カナ子氏、U.ウンダー氏、T.クンテン氏、立澤史郎氏

（学芸グループ 中田 篤）

講習会

東シベリア・サハの楽器・口琴体験

2012.8.25

講師 ただがわ 直川 れお 礼緒（日本口琴協会代表）
しんき 鈴木 紀美代（ムックリ奏者）

特別展の関連事業として、サハ共和国で人気の高い口琴^{こうきん}について紹介する催しを行いました。

最初に、アイヌの口琴「ムックリ」の製作者であり奏者でもある鈴木さんにムックリを、直川さんにサハの口琴「ホムス」を演奏していただきました。

続いて直川さんから、世界的な口琴の広がりや音が出るしくみなどについての解説がありました。

口琴は杵と振動弁から成る単純な構造の楽器ですが、良い音を出すためには弁や杵の長さや厚さ、弁と杵の間の隙間、全体のバランスなどが精密に調整されています。

原則として一つの音しか出ないのも口琴の特徴です。西欧の楽器が多く音を出す方向に発達してきたのに対し、口琴はたった一つの音を口の中で変化させることによって多彩な音色を表現する方向に発達してきたのです。

説明の後、直川さんの指導の下、参加者の方に口琴の演奏を体験していただきました。最初はうまく音が出せなかったのですが、しばらくすると口の中で音を増幅したり、振るわせたりすることができるようになった人もいました。

次に、直川さんの解説と写真で、2011年にサハ共和国で開催された国際口琴大会の様子や、サハ共和国での口琴の人気ぶりが紹介されました。

最後にもう一度、鈴木さん、直川さんによる口琴の演奏が披露され、参加者の皆さんの拍手を集めていました。



鈴木さん（左）と口琴を演奏する直川さん

東シベリア・サハの刺繍

2012.8.25

講師 直川 ナディア（サハ文化伝承者）

午後からは、サハ出身で日本にお住いの直川ナディア^{ししゅう}さんを講師に迎え、フェルトにサハの伝統的な文様を刺繍し

たコースターを作りました。

参加者はまず、フェルト、糸をそれぞれ2色、数種類ある型（講師がサハの古い衣類などからデザインを採って作ったもの）から一つを選び、一枚目のフェルトに型を当ててチャコペンで文様を写しました。

次に、チャコペンで描いた線の上にチェンステッチで刺繍を施しました。一色目の糸で文様の線を描き終えたら、その内側に別の色の糸でもう一本の線を刺繍します。

最後に2枚のフェルトを重ね、フェルトの縁に沿って文様を囲む刺繍を施して完成です。

参加者のなかには慣れない作業に苦労している方や、時間内に完成まで至らない方もおられました。それでも、講師によるサハの伝統的な衣類についての解説などを通して、背景となるサハの文化にも親しんでいただけたと思います。

東シベリア・サハの料理

2012.8.26

講師 直川 ナディア（サハ文化伝承者）



魚パイの生地を伸ばす直川さん

翌日午前中には、同じく直川ナディアさんによるサハの伝統料理の講習会と試食を行いました。

メニューは、魚パイ、イエヂェゲイ（カッテージチーズ）、キュオルチェハ（ホイップクリーム）、アラーディ（揚げパン）の4品です。

最初に魚パイを作りました。強力粉に溶かしバターと卵、水を加えて作った生地で、細かく切った魚と玉ねぎを包み、オーブンで焼きます。

魚パイが焼き上がる間に、他の3品を作りました。イエヂェゲイは、牛乳とヨーグルトで作るカッテージチーズです。砂糖やジャムを添えていただきます。

キュオルチェハはサハの泡立て器「キュオルチェハ」で生クリームを泡立てたものです。ホイップクリームのようなになったら、こちらも砂糖やジャムを入れて仕上げます。

アラーディは、強力粉に牛乳、卵、水、塩を加えて作った種を油で揚げたものです。

料理の完成後には参加者全員で試食しながら、サハの乳製品や肉料理など食文化に関するお話を聞いたり、直川ご夫妻のお子さんたちによるサハの伝統的なゲームの実演を楽しんだりしました。（学芸グループ 中田 篤）

アイヌ文化講習会

アイヌのシカ笛づくり

2012.6.30

講師 野本 正博

(財団法人アイヌ民族博物館 館長)

岡田 恵介

(財団法人アイヌ民族博物館 事業普及係長)

今年度のアイヌ文化講習会では、白老町の財団法人アイヌ民族博物館の協力により、アイヌの伝統的な狩猟具のひとつであるシカ笛づくりを体験しました。アイヌ民族博物館の野本正博館長、同館伝承課の岡田恵介事業普及係長の指導により、16名の参加者はさっそくシカ笛づくりに挑戦しました。本講習会の材料や道具等はすべてアイヌ民族博物館で用意していただきました。シカ笛は音楽的には膜が振動して音を発する膜鳴楽器に分類され、薄い膜が重要な材料です。笛の本体には比較的軟らかく加工しやすいホオノキを用いましたが、膜の材料にはエイの一種のカスベ（メガネカスベ）の皮を、この皮を本体に固定するための紐にエゾシカの腱が使われました。

シカ笛が音を発する原理は、吹き込んだ息が出口から出て薄い膜と笛の本体とのすき間を抜ける際に、膜を振動させて音を発することです。エゾシカの鳴き声に似た音を鳴らすには、息の出口の位置と形状が重要なポイントになるため、この部分を彫刻刀で丁寧に削って形を整えなければなりません。笛本体と膜とは息の吹き出す下端を除いて接着させて完成です。シカ笛は膜の緊張状態や乾燥状況などによって音がさまざまに変化しますが、実際に自分の作ったシカ笛を吹いて鳴らしてみると、そのことがよく理解できました。講師の岡田さんは、シカ笛に対する野生のシカの行動を観察してきましたが、撮影されたビデオからシカ笛の効果の大きさを理解することができました。

最後に、博物館横の芝生の上で、エゾシカに見立てたワラ製のシカを弓矢で射る体験で講習会を終了しました。



完成したシカ笛

(学芸グループ 渡部 裕)

講演会

氷と寒さを利用する文化

ーサハの生活と社会

2012.7.14

講師 高倉 浩樹

(東北大学東北アジア研究センター 准教授)

サハに暮らす人びとの生活をより詳しく知っていただくため、特別展の関連事業として講演会を開催しました。講師の高倉氏は、大学院生だった頃からほぼ20年間にわたってサハ共和国で調査を行ってきた文化人類学者です。

まず導入として、北方地域の環境の特徴、そして日本ではあまり知られていないシベリアの民族全体についての紹介がありました。シベリアの人口約4000万人のうち先住民人口は約150万人に過ぎないこと、スラブ系ロシア人による開発の歴史、先住民の民族的・言語的多様性、そしてそこに暮らす人びとの生業などが説明されました。

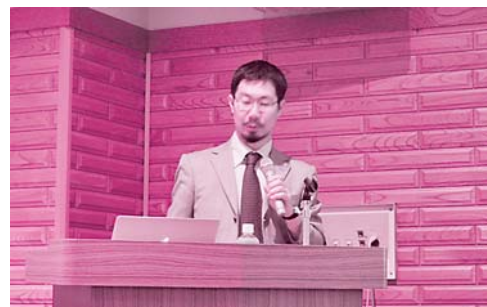
次に、サハ共和国の気候や植生、サハ（ヤクート）の民族的な特徴、おもな生業としての狩猟、漁労、ウマやウシの牧畜についての紹介がありました。

そして、最後に講師自身の現地調査から、サハの「氷と寒さを利用する文化」について報告いただきました。

サハ共和国は、人が住む場所としては地球上で最も寒く、人びとは一年の半分以上を雪や氷に囲まれて暮らしています。こうした環境の下、サハの農村部では、毎年10～11月に凍結した湖でかごや網を使った漁がおこなわれます。また、この時期に湖からまとまった量の氷を採取して保存し、それを少しずつ溶かして一年分の飲料水としています。

これらの作業は、湖が凍結していればいつでもできそうに思われるのですが、実際に行われる時期は限られています。この時期は氷の厚さが20cmほどで、これより薄いと人が乗った時に割れてしまう危険があり、これ以上厚いと切り出して引き上げるのが難しくなるのだそうです。

つまり、冬の環境といっても一様ではなく、人びとは寒さの度合いやそれに伴う氷の状態を敏感に把握し、それらを取り入れて生活を組み立てているのです。



高倉講師

(学芸グループ 中田 篤)

調査・講習会

能取岬西岸遺跡発掘調査

2012.6.19-6.26

講習会「発掘体験」

2012.6.24

昨年に引き続き、今年も能取岬西岸遺跡の発掘を行いました。この遺跡は、オホーツク海を一望する雄大な景観で知られる能取岬の西岸、観光客の多く訪れる灯台の辺りから約800m離れた原野のなかにあります。これまでに当館では、この遺跡の1号から3号までの竪穴住居址を確認しました。2号住居址は全体を発掘した結果、オホーツク文化の刻文期の遺構であることがわかっています。遺跡の標高は40m以上あり、同じオホーツク文化のモヨロ貝塚（標高6m）や、湧別町川西遺跡（標高6m）などと比べると、かなり高いことが特徴です。

今回の発掘調査で対象としたのは、1号住居址です。1982年に西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）、右代啓視氏（北海道開拓記念館）によって、最初にオホーツク文化期のものとして報告された遺構で、風蝕によって徐々に失われていくことが指摘されていました。崖際にあり、今回の発掘開始の時すでに崖側が崩れ落ちて半壊した状態でした。

今回は、半壊した遺構を崖面から陸の内側に向かって掘り進めました。また、この遺構のおよそ2m離れた場所にトレンチ（試掘溝）を掘りました。結果として見つかった遺物は、土器片、石器、動物骨、約450点でした。そのうち土器片ではオホーツク式のものが76%で、残りが縄文式、続縄文式、擦文式などでした。なかでもオホーツク文化の刻文期（7世紀ごろ）のものが多くみられます。石器では、石鏃や石斧、スクレーパーなどが少数出土しました。

また、調査期間中の6月24日（日）に講習会「発掘体験」を行いました。参加者全員が移植ごてを持ってトレンチに入り、次々と遺物を発掘していました。



自分で見つけた土器片を手にした講習会の参加者

（学芸グループ 角 達之助）

北海道博物館紀行

根室市歴史と自然の資料館

2012.7.7

講師 猪熊 樹人

（根室市歴史と自然の資料館・学芸員）

「北海道博物館紀行」は道内の博物館を紹介する事業です。今回は、根室市歴史と自然の資料館の猪熊樹人氏を講師に迎え、「剥ぎ取り資料の意義-津波と貝塚の話-」と題してご講演いただきました。以下に内容を紹介します。

根室市歴史と自然の資料館では、一定区画の土地を垂直に掘り、その壁際を剥ぎとっています。このように土の剥ぎ取りを行うことで、過去の津波の痕跡を探しています。

根室半島の太平洋沖には千島海溝が東西に走っており、ここでは海溝型地震とそれに伴う津波が発生し、過去に大きな被害をもたらしてきました。このことについては古文書などの記録もありますが、少数で具体性にかけており、古文書だけでは過去の津波の周期性やそれを予知し、防御するには役に立たないそうです。

そこで、根室の地質に着目し、津波堆積物の分布調査を行ったところ、根室半島の太平洋岸の低湿地のほとんどで津波堆積物が見つかったそうです。堆積物中には海にすむ珪藻が帯状に見つかり、これらの地層が陸から見つかるということは、巨大津波によるものとし考えられなといいます。またこの堆積層には年代比定が可能な火山灰層も混ざっており、それをもとに巨大津波の発生（津波堆積物の形成）は350年から400年間隔ということが明らかとなったと解説されました。

地層の剥ぎ取りは過去の津波の発生間隔を示すだけではなく、縄文時代の貝塚から、当時の食生活を復元することも可能です。同館ではオホーツク海沿岸に3か所しか発見されていない縄文時代の貝塚の一つである関江谷1遺跡（縄文時代前期：約5,000年前～6,000年前）を調査しています。この遺跡の貝塚には、アサリが多く、ウバガイやオオノガイもよくみられました。魚類ではカレイ類やニシンが中心でした。ところが、魚類の中に、北海道でも珍しいサバ類が見つかり、当時、海水温がやや高かったことがわかってきました。

このように剥ぎ取り作業を行うことによって、津波の痕跡から縄文時代の食生活まで、幅広い研究資料を得ることができ、また実際の剥ぎ取り資料を直に展示することで、絶好の博物館資料ともなると説明されました。

（学芸グループ 角 達之助）

第27回 北方民族文化シンポジウム 環境変化と先住民の生業文化

日時 2012年10月13日(土)、14日(日) 各9:00～16:00

会場 オホーツク・文化交流センター (エコセンター2000)
大会議室 [入場無料、10月10日までにお申し込みください]

発表者 (敬称略/順不同) ※ 全発表に同時通訳が付きます
谷口旭 (東京農業大学)、スチュアート・ヘンリ (放送大学)、
ジェームズ・サベル (マッギル大学)、手塚薫 (北海学園大学)、
ロバート・ロージー (アルバータ大学)、大村敬一 (大阪大学)、
久保田亮 (立教女学院短期大学)、渡部裕 (当館)

関連事業

上映会「星野道夫 Alaska 星のような物語 思索編 (夏～秋)」

日時 2012年10月10日(水) 18:30～19:30

会場 オホーツク・文化交流センター (エコセンター2000)
エコホール [当館、エコセンター、網走市役所受付にて
配布している無料の入場整理券をお持ちください]

明治大学政治経済学部寄贈資料展 ～明治大学アラスカ遠征の記録～

2012年11月1日(木)～12月16日(日)

観覧無料

1960年、明治大学が創立80周年を記念して企画したアラスカ遠征について、当時の資料を用いながら紹介します。



INFORMATION

移動展

◆ 7月2日(月)～7月26日(木)、富山大学附属中央図書館(富山市)にて、移動写真展「北にくらす子どもたち」(同学人文学部との共催)が開催されました。

◆ 7月15日(日)～9月17日(月)、財団法人アイヌ民族博物館(白老町)にて、移動展「イヌイトの壁かけ一極北の生命とぬくもり」(アイヌ文化遺産活用地域活性化協議会・財団法人アイヌ民族博物館との共催)が開催されました。7月28日(土)に行われた関連行事・ワークショップ「ふわふわアザラシとイヌイトのヨーヨーをつくろう!」では、笹倉いる美学芸主幹が講師を務めました。

行事報告

◆ 6月16日(土)～7月1日(日)、ロビー展「オホーツクの工芸 織物編」を開催しました。網走市近郊で手作りの織物を楽しんでおられる方々の作品を紹介しました。



◆ 7月1日(日)、野外コンサート「Museum Summerコンサート2012」(出演:網走吹奏楽団)、「ポートアルバーニ・カフェ」(協力:ポートアルバーニ・ファンクラブ)、「チャーリーのバルーンアート」(講師:バルーンアーティスト・篠田卓氏)を開催しました。

◆ 7月26日(木)～8月25日(土)、網走商工会議所の主催で「ミュージアムライティング2012」を実施しました。最終日の夜には、東日本大震災チャリティコンサート「土田英順チェロコンサート」が開催されました。

◆ 7月27日(金)、学校教育関係者対象のアイヌ文化理解研修会「アイヌ文化の何を学ぶべきか」(後援:北海道教育庁オホーツク教育局、網走市教育委員会、講師:江別市立対雁小学校教諭・佐々木博司氏、アイヌ語地名研究家・伊藤せいじ氏)を行いました。

◆ 8月4日(土)、はくぶつかんクラブ「革でつくるトーテムポールのペンスタンド」(講師:永瀬早苗解説員)を行いました。



◆ 8月11日(土)、12日(日)、正面の池でアリュートのカヤック・バイダルカの復元模型「アルガラフ号」を浮かべて試乗体験を行いました。

◆ 8月18日(土)、富山の4人組ボーカルグループ「空の泉」のミニライブを行いました。友情出演の時崎久夫氏によるギター伴奏とともに、昨年の特別展テーマ曲「フレップの頃」やウイルト民謡など、北にちなんだ曲が披露されました。



北方民族博物館だより No. 86

平成24(2012)年9月28日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者

財団法人北方文化振興協会